

(2)私の愛読する漢詩

伊藤幸郎氏に随想をお願いした。氏の愛読する多くの漢詩の内から

中国・唐代の詩人孟浩然の“春暁”と李白の“秋浦歌”を選んでいただいた。昔の教科書にあったので覚えている方も多いだらう。

もう間もなく春です。元気に春を迎えますよとの思いで皆さんに贈ります。

しゅん ぎょう もう こうねん
春 暁 孟 浩然

しゅんみんあかつきをおぼえず しよしよていちょうをきく
春眠不覚暁 處處聞啼鳥

やらいふううのこえ はなおつることしらずいくばくぞ
夜来風雨聲 花落知多少

現代文訳

春の眠りの心地よさに夜の明けるのにも気がつかず、うつらうつらしていると、あちこちに鳥の鳴き声が聞こえる。はて昨夜風雨の音がしていたがどれほど散ったのかな。

註：孟 浩然（689—740）湖北（洞庭湖の北）の人、五言詩にすぐれ、自然の美を歌った。

しゅうほのうた り はく
秋浦歌 李白

はくはつさんぜんじょう うれいによってかくのごとくながし
白髪三千丈 縁愁似個長

しらずめいきょうのうち いずれのところにかしゅうそうをえたる
不知明鏡裏 何処得秋霜

現代文訳

失意憂愁に沈む晩年の心境を歌う。

わが白髪がなんと三千丈、つもり積もった愁いのために、こんなに長くなってしまったのだ。澄んだ鏡の中のこの姿、どこから得てしまったのであろうか、この秋の霜のような白髪を。